



Title	〈主婦〉再考：女性がケア主体化するメカニズムに着目して
Author(s)	藤田, 嘉代子
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/26238
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

〔 題 名 〕

＜主婦＞再考—女性がケア主体化するメカニズムに着目して

学位申請者 藤田嘉代子

わが国は両性の平等が理念的に謳われながら、ケアワークをもっぱら女性に負わせる性別分業社会である。教育や雇用の面でジェンダーの格差は取り除かれつつあるものの、ケアが家庭の中で私的に行われるという家族主義のために、仕事を持った女性の約6割が出産を機に離職し専業主婦になる状況は現在も続いている。

本論文においては、性別分業社会において、女性がケア主体になるという水路付けがどのように行われているか、行為者の立場から分析を行いそのメカニズムを明らかにしたものである。具体的に着目した点は、家事育児実践とライフコースをめぐる選択である。

本論文における家事研究は、従来の生活時間調査等数量的なデータの分析に拠らない、ジェンダーと主観性に着目した家事分担の質的研究である。父親による家事は、効率的にできる、判断のいらない家事である傾向が強く、母親による家事は家事や育児をマネジメントすることも含めた包括的なケアであった。このような家事内容の違いは、育児期に入る前から、差異付けられており、父親たちは実践的な家事に関する経験が積む機会のないままに子育てという現場に立っていることが明らかになった。

ライフコースをめぐる選択に関しては、学卒後の仕事を離職し専業主婦になった女性たちの「選択」と、専業主婦から再就業しようとする女性を中心に、仕事と子育てのある暮らしがどのように構築されているかをインタビューデータから明らかにした。多くの女性たちにとって就業継続するかどうかの判断は、妊娠し子どものケアに責任を持つということと、職務上の責任が対立的に捉えられ、退職は不可避的な選択として行われていた。多くの女性たちは、専業主婦であるというアイデンティティは一時的なものであると捉えており、「子どもの手が離れたら再就職」という見通しを持っていた。しかしながら、一旦築かれた子育てライフスタイルは固定化される傾向がある。そもそも就業と両立が不可能と判断した彼女たちは、再就労のためのサポート資源を欠いている状況にある。実際再就労した女性たちは、仕事と子育てという生活を組み立てるのに際し、夫や親族、購買力という就業継続者の多くが持つ資源を欠き厳しい子育てを強いられていた。

このような分析から、女性がケアを引き受けることを自明視する社会にあって、ケアを担う存在となったことが、経済的な不利益を生み、さらにケアを自己の責任として担い続けることになる、という性別分業社会の循環的なサイクルが明らかにされた。このような状況を変革するためには、女性が行っているケアに対する価値付けを変えていくこととケアの社会化が必要である。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名 (藤田嘉代子)	
	(職)
論文審査担当者	主査 教授 牟田和恵 副査 教授 スコット・ノース 副査 准教授 辻大介

論文審査の結果の要旨

本論文は、育児や家事のケアワークをもっぱら女性に負わせる性別分業が継続するメカニズムを解明することをテーマとしている。性別役割分業自体は、1970年代以来、社会学はじめ諸学問領域で研究が蓄積されているが、本論文はそれらを踏まえながら、行為者の側からの視点に着目し、①ケアの担い手になるとはどのような経験・選択であるのか、②そもそもケアとはどのような行為か、③どのように性別分業が維持されているのかを、質的な調査により解明している。

まず第1、2章で、主婦である/主婦になることがどのように論じられてきたかをフェミニズム研究と社会学研究のそれぞれの蓄積から整理し、第3～6章にわたって、子育て期の夫婦を対象とした実証研究に基づき、上記の3点を解明していく。出産を機として離職し専業主婦となる女性たちは、就業継続する女性たちが保有しているような資源を持たず、職場が要求するレベルで職務をこなすことができないという葛藤の中で離職を余儀なくされる。仕事への意欲が強く職業上のパフォーマンスレベルが高い女性たちは、離職するというアイロニーがそこには見られるのである。そして、彼女たちの多くは専業主婦であることを永続的なライフスタイルとは考えていないが、家事育児を専業主婦である女性が担い、夫が収入を得る仕事をするというライフスタイルがいったん築かれると、再就労のために夫の帰宅時間を早めることを求めたり他の育児資源を得ようしたりするなどの現実的な行動がとられることはあまりなく、意図せざるままに性別分業が維持継続されていく。また、本論文が明らかにしているのが、家事労働のジェンダー化された状況である。妻がフルタイム勤務で比較的よく分担されている場合でも、夫に分担されている家事は、時間的な制約を受けにくく機械を使って効率的に作業できる家事であり、効率の上がりにくい瑣末な家事、管理や判断、包括的なマネジメントが必要な行為は、家事の核心でありながらむしろ不可視で、もっぱら妻にゆだねられそれは変わることがない。また、家事能力を獲得していくジェンダー・ハビトゥスの形成過程をみると、女性たちは、子供の時の家事の手伝い、一人暮らしでの家事、結婚後の経験と、成層的に技能や感覚を獲得しているのに対し、男性は、アルバイトや仕事を通じてある種の業務として能力を獲得している場合もあるが、一方で長い勤務時間や家事をしなくてよい立場にながくあることで、能力を獲得する萌芽は断ち切られ、ハビトゥスとして継続的な力になっていかないのである。

女性たちがケアを担う存在となることは、その立場から脱することを困難にする道に追い込むことにはかならず、ケアを担い続け、ますます経済的な不利益につながっていく。そして、妻/母親たちは、趣味や家庭外の活動に深く傾倒し、主婦役割を手段的なものとしてとらえ、感情的資源投入を減らし、家族という場から心理的に退くというアイデンティティ操作を行っていく。

以上のように、本論文は、従来、生活時間調査等数量的なデータによってもっぱらとらえられてきた家事研究、家事分担研究とは異なり、行為者の主観に着目し、また、近年フェミニズムで研究が活発になっているケアの倫理に関する議論に依拠しつつ、ケア行為の意味と構造について深く掘り下げたものであり、ジェンダー平等、男性の家庭参加が唱えられながらも遅々として変わらない性別役割分業について新たで有効な知見を提供している。

以上のことから、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。

